

「鬼」のイメージと比喩表現について

—アンケート調査の分析—

佐々木 翔太郎

1. はじめに

佐々木 (2008a) は北原 (2006) が国語辞典に載せたい言葉を募集して発刊した『みんなで国語辞典!』を参照し、「メル友」「親友」など友人を表す呼称の一つとして「鬼ダチ」という語に着目している。「鬼ダチ」は「とても仲のいい友達のこと。(中略) 別に鬼のように怖い顔の友達のことではない」(北原 2006、投稿者は中学生)と説明されている。米川 (1997) は『若者ことば辞典』で「鬼」を次のように定義している。

おに～ 鬼～

〔「鬼のように」(非常に)の略〕接頭語で、非常にを意味する強調語。

(中略) 形容詞の語幹や名詞につく。

(米川 1997)

また、『現代用語の基礎知識』(自由国民社)では「鬼のように」と「鬼」の掲載が見られる。「鬼のように」は1988年版を初出に2009年版までの間で計11回掲載があり、「鬼」は見出し語としては1990年版を初出に2009年版までの間で計14回掲載がある。いずれも米川 (1997) と同じく「ひどく」「ものすごく」「とても」などの強調語として意味説明がされている。さらに、「鬼」は「鬼かわ」(非常にかわいいこと)「鬼買い」(大量に買い物をする)など、具体的な用例の掲載も見られる。

以上のことから佐々木 (2008a) は「鬼ダチ」を「鬼のように(仲の良い)友達」の略語としている。「鬼」や未省略形の「鬼のように(な)」は、強意的用法として働くことがあると考えられる。米川 (2009) もカタカナ表記「オニ」を若者ことばの強調語としている。

しかし、一般的には人間から忌避されているはずの「鬼」が親しい間柄を示す「友達」と結合し、より親しさの増す表現として成立しているのは不自然に思われる。「鬼ダチ」を投稿した中学生は「別に鬼のように怖い顔の友達のことではない」と説明をしているが、これは、説明をしておかなければ誤解を招きかねない、「鬼ダチ」の「鬼」が持つ特異性を示唆しているとも考えられる。

小学館 (2000-2002) 『日本国語大辞典(第二版)』(以下『日国』)では「鬼」について非常に多くの意味記述がされ、鬼が多面性を持った存在であることがうかがえる。しかし、米川 (1997) が提示した強意的用法としての意味記述は見られない。『日国』には掲載されず、『若者ことば辞典』や『現代用語の基礎知識』では掲載されている「鬼」の強意的用法は、近年になって使用の広まった新しい表現法であると考えられる。

鬼は想像上の生き物であり、その姿形も行動様式も人間によって決められた部分が多い。そのため、日本語における「鬼」を用いた表現、特に比喩表現には、人々の鬼に対するイメージが強く影響していると思われる。

「鬼」のイメージと「鬼」を用いた比喩表現についてデータを得ることで、「鬼」のイメージがどのように表現に反映されているかを明らかにすることができると考えられる。さらに、「鬼」の強意的な性質に関して、「鬼」のイメージとのつながりを見出すこともできるであろう。本稿では、「鬼」のイメージと比喩表現について比較・分析を行い、「鬼」の強意的用法への機能変容を分析する手立てとしたい。

2. 先行研究

佐々木 (2008b) は、中国より伝来した日本の「鬼」が時代と共に意味範囲を拡大させていることに着目し、日本人と中国人の「鬼」のイメージの共通点や相違点を明らかにするために、「鬼」を中心概念に置いたマインドマップ (mind-map)^(注1) 調査を行った。その結果、日本人と中国人の間に共通するイメージはあるものの、鬼の容姿や性質などのイメージに関して差異があることが明らかになった。

本稿では、佐々木 (2008b) が明らかにした日本の「鬼」のイメージが比喩表現へどう反映されていくかについて検討を行う。

3. 研究方法

本稿では、質問紙法によるアンケート (別添資料参照) で実施した二つの調査の結果をもとに、日本語の「鬼」のイメージと比喩表現について分析を行う。

①マインドマップ調査による分析 (別添資料：設問1)

マインドマップ調査は佐々木(2008b)によって結果が示されている。本稿では佐々木(2008b)の日本人対象の調査結果を採用し、日本人のイメージする「鬼」がどのようなものであるかを再検討し、②の文章完成法調査を分析する際の参考資料として活用する。

②文章完成法調査による分析 (別添資料：設問2)

(1)「鬼のような」と(2)「鬼のように」の2種類の書き出しを提示し、後接部分を自由に記述してもらった設問形式とした。

「鬼のような」「鬼のように」はともに「鬼」の直喩表現であり、「鬼のようだ」を基本型とするナ形容詞 (いわゆる形容動詞) 的用法と言える。「鬼のような」は体言、「鬼のように」は用言をそれぞれ導く。記述された後接部分を集計し、具体的にどのような事象や様態、行動が比喩されるかを調査する。

4. アンケート調査の概要

別添資料のアンケートは2008年6月2日から8月29日にかけて実施、回収された。

マインドマップ調査は日本人と中国人を対象とし、文章完成法調査は日本人のみを対象とした。日本人対象の調査の有効回答者数は323名 (男性110名、女性213名) で、年齢別内訳は10代99名、20代77名、30代33名、40代54名、50代40名、60代以上20名であった。

5. マインドマップ調査

表1 「鬼」に抱く日本人のイメージ

容姿イメージの出現例	性質イメージの出現例
怪物	怖い 悪い 強い 大きい
男性	
赤鬼、青鬼	
金棒	
角、牙、もじゃもじゃ頭	

表1は、佐々木(2008b)がマインドマップで調査した日本人のイメージする「鬼」の特徴を、出現度数の上位項目を中心にまとめたものである^(注2)。佐々木(2008b)は「鬼」のイメージを容姿に関する出現語(以下「容姿イメージ」と性質に関する出現語(以下「性質イメージ」)に分類している。

容姿イメージについて、日本の「鬼」は男性イメージや怪物イメージでとらえられ、角や牙を持ち、金棒を持って暴れ回る容姿でイメージされている。

性質イメージでは、形容詞「怖い」「悪い」が出現した。鬼のマイナスイメージが強調される一方で、プラスイメージの形容詞「強い」「大きい」も出現した。これらの語は場合によって特に女性には悪い印象を与えることもあるが、本稿では日本の「鬼」が男性でイメージされていることや、「弱い」に対する「強い」、「小さい」に対する「大きい」という語の位置付けを考慮し、プラスイメージとする。日本の「鬼」はマイナスイメージのみならず、プラスイメージも持ち得ている。これは中国の「鬼」では得られなかった、日本の「鬼」における非常に興味深い特徴であった。「鬼」の強意的用法は日本の「鬼」が持つプラスイメージが反映されたものと考えられる。

次の図1は「鬼」のマインドマップと文章完成法の関連を示したものである。

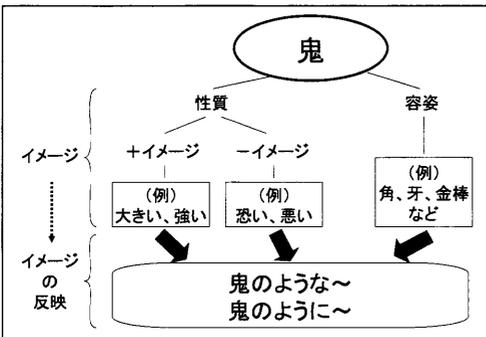


図1 「鬼」のマインドマップと文章完成法の関連

比喩表現は比喩に用いる語の意味や状態、イメージが反映される表現である。人々の想像に支えられて存在し続けてきた「鬼」では、そのイメージが比喩表現に密接に反映されるであろう。したがって、「鬼」のマインドマップ調査の結果と文章完成法調査の結果は、非常に関連性が高いと考えられる。

佐々木(2008b)は、鬼は「不確かな存在であるが故に人間の主観によって意味が付与される部分が大きい」と指摘している。性質イメージの形容詞は回答者の

の主観が強く表れている語であり、特に比喩表現として表出されやすいと考えられる。

6. 文章完成法調査

文章完成法調査 (1)「鬼のような～」{以下「調査(1)」}と(2)「鬼のように～」{以下「調査(2)」}のそれぞれの集計結果を示す。

6-1. 集計方法

集計の際には、集計作業や分析を行いやすくするために、調査(1)と調査(2)でそれぞれ次のようなコード化やカテゴリー化を行った。

調査(1)

回答された後接の語・表現を、意味上の類似性を考慮し次のようにコード化した。

例：目、大きな目、瞳 → 「目」とコード化

さらに、各コードを意味に応じてカテゴリー化し、カテゴリーの出現度数を比較した。

例：「目」「体」「角」「口」「パンツ」 → 【容姿】とカテゴリー化

カテゴリーは【顔】【容姿】【人物】【性質】【動作】【数量】および【その他】とした。

調査(2)

回答された後接の語・表現を(1)と同様にコード化した。

例：働く、働いた、仕事をする → 「働く」とコード化

調査(2)では各コードを品詞別に分類し、出現度数や出現率を比較した。

6-2. 調査(1)「鬼のような～」集計結果

調査(1)の集計結果をカテゴリー別に以下の表2に示す。

表2 調査(1)「鬼のような～」カテゴリー別集計

(n=323)

カテゴリー	出現度数	コード ([] は出現度数)
顔	292	顔 [145]、形相 [132]、面 (つら) [9]、表情 [3] など
人物	163	人 [61]、母 [18]、先生 [15]、嫁 [15]、姑 [6] など
性質	153	恐さ [66]、心 [28]、強さ [18]、性格 [13]、忙しさ [7] など
容姿	88	目 [32]、体 [20]、角 [7]、パンツ [7]、牙 [3]、髪 [3] など
動作	36	ふるまい [8]、仕打ち [6]、食べ方 [4]、笑い方 [3] など
数量	22	スピード [5]、量 [4]、課題 [4]、練習 [2]、暑さ [2] など
その他	27	お面 [4]、岩 [3]、勢い [2]、怪物 [1]、恋 [1]、打球 [1] など

【顔】カテゴリーが圧倒的に多く、300近い出現度数を得た。【顔】カテゴリーは【容姿】カテゴリーの一部とも考えられるが、出現度数が非常に高くなったため、独立したカテゴリーとして区別した。鬼の顔はお面として用いられ、鬼の容姿の中でもインパクトのある部分であるため、体言を導く「鬼のような～」で最もイメージされやすい比喩対象だったのであろう。【顔】カテゴリーに分類した出現例は、鬼の顔全体を指摘しているものに限定した。したがって、【容姿】カテゴリーの「目」や「角」「牙」「髪」などは、鬼の顔を形作るものではあるが、これらは顔の一部であるため、【顔】カテゴリーには含めなかった。なお、「お面」は【その他】に分類した。能面の般若や節分のお面などがあると思われるが、これらは鬼の顔をかたどった作り物であり、鬼そのものを指し示すものではないため、【顔】カテゴリーには含めなかった。仮に、対象外としたこれらの語まで【顔】カテゴリーに含めたならば、出現度数は350近くまで増加することになる。

【顔】 カテゴリーに次いで多いのが【人物】【性質】 カテゴリーで、160前後の出現度数を得た。「日国」では「鬼」について「(比喩的に用いて) 鬼のような性質をもっている人。また、鬼の姿と類似点のある人」とされている。【人物】 カテゴリーが高い出現度数を得たのは、「鬼」が人間を比喩することが多いためと考えられる。

【性質】 カテゴリーでは、マインドマップ調査で上位項目となった性質イメージの形容詞「怖い」「強い」を名詞化した「恐さ」「強さ」が出現し、特に「恐さ」は全回答の中でも「顔」「形相」に次ぐ3番目に高い出現度数であった。なお「恐さ」には、シク活用形容詞の転成名詞「恐ろしさ」もコード化して含めている。その他の性質イメージの「悪さ」と「大きさ」は回答されなかった。「心」の回答例としては、「心」の他に「気持ち」「気性」「優しい心」などがある。「優しい心」は「怖い」イメージが非常に強い鬼の中でも親しみの持てる「ないたあかおに」や「こぶとりじいさん」^(注3)のような鬼のイメージが表出したものであると考えられる。

【容姿】 カテゴリーでは、マインドマップ調査で上位に入った「角」や「パンツ(虎柄パンツ)」「牙」よりも「目」や「体」の方が出現度数が高くなった。「角」や「牙」は鬼固有のものであるため、鬼の容姿で人間を比喩する際には使用されにくい語であると考えられる。

【動作】 カテゴリーでは「仕打ち」のように特定の動作を表す名詞や「食べ方」「笑い方」などのように「～方」という形で動詞を名詞的にした回答が得られた。「鬼のような～」と体言を導く書き出しであったため、【動作】 カテゴリーの出現度は低くなった。

【数量】 カテゴリーは、「量」のように物事の量を表したり、「スピード」は速度、「暑さ」は温度といった具合に、その程度を何らかの形で数値化したりできる後接部分をまとめたものである。出現度は低いですが、生き物の「鬼」が「量」を比喩している非常に興味深いカテゴリーである。

【その他】は前述の「お面」をはじめとして、特定のカテゴリーに分類し難い語をまとめている。「岩」は鬼のごつごつした顔や体をイメージしての回答であると思われる。「大きな岩」という記述もあり、「大きい」というイメージも関連しているようである。「勢い」は具体的にどのような勢いなのかが表現されていないが、何らかの勢いが増している様子を表現していると思われる。また、「恋」や「打球」のように、鬼とは全く関係の無さそうな語にまで修飾している例も見られた。

6-2-1. 性質イメージの表出

マインドマップ調査で得られた性質イメージの語は調査(1)において「恐さ」「強さ」のように直接回答されたものの他に、後接部分の体言を修飾するために「鬼のような」に付随して出現している。その具体例を以下の枠内に示す。なお、二重傍線で示している部分は、傍線部「鬼のような」に係る体言である。括弧内は、回答者の年齢と性別およびカテゴリーとコードを示す。

- | | | |
|---|----------------------|---------------|
| a | 鬼のような <u>こわい顔</u> | (60代女性【顔】「顔」) |
| b | 鬼のような <u>顔</u> ≡ 恐い顔 | (20代女性【顔】「顔」) |

aでは修飾語「鬼のような」と被修飾語「顔」の間に性質イメージの形容詞「怖い」が出現している。このとき、「怖い」は「鬼」のイメージから導かれた語であり、「鬼のような」と言う場合、実際にどのような様子を指し示しているのかを具体的に説明している。aのような回答が得られたことから、bのように、性質イメージを伴わず単に「鬼のような顔」と書かれているだけの記述にも、「怖い」というイメージが含まれていると推測が可能である。「悪い」や「目つきをした」など、他のイメージも当然考えられるが、それらの表出可能なイメージのひとつとして「怖い」がある。「鬼」に対するイメージは確かに比喩表現として表出していると言えよう。以下の例ではプラスイメージの「強い」や「大きい」が表出していると考えられる。

- | | | | | |
|---|--------------------|---|---------------|------------------|
| c | 鬼のような <u>強い力</u> | ≡ | 豪快な(猛烈な)食べっぷり | (10代女性【性質】「力」) |
| d | 鬼のような <u>食べっぷり</u> | ≡ | 豪快な(猛烈な)食べっぷり | (20代女性【動作】「食べ方」) |

cの後接部分「力」は強弱や大小で表現が可能であるため、「強い」「大きな」と直接付け足すことができる。しかし、dの「食べっぷり」を「強い食べっぷり」「大きな食べっぷり」とすると違和感がある。このような場合、「強い」や「大きい」はある行動から感じられるエネルギーの強さを示すものとして反映されていると考えられる。dは「食べる」という行動の様子が並外れていることを表現するために、「強い」「大きい」というイメージを用いて「鬼のような」という比喩がなされたのである。このようなイメージを含み、かつ、「食べっぷり」を修飾するのに違和感のない語を補うならば「豪快な」「猛烈な」などが例として挙げられるだろう。「強い」「大きい」の表出による比喩は、「鬼」の強意的用法の性質を持つと考えられる。

6-2-2. 「鬼」のイメージ内・外という観点から考える強意的用法

次の例で示す後接の比喩対象は、前項の回答例とは比喩の性質が異なっているように見受けられる。

- | | | | | |
|---|------------------------|---|-------------|------------------|
| e | 鬼のような <u>忙しさ</u> に目を回す | ≡ | 猛烈な忙しさに目を回す | (10代女性【性質】「忙しさ」) |
| f | 鬼のような <u>スピード</u> | ≡ | とても速いスピード | (30代女性【量】「スピード」) |
| g | 鬼のような <u>恋</u> | ≡ | 情熱的な恋 | (20代男性【その他】「恋」) |

e～g、いずれにおいても性質イメージの「強い」「大きい」が反映されている「鬼」の強意的用法であると思われる。eでは「目を回す」という記述もあり、忙しさが並大抵ではない様子がうかがえる。

しかし、「鬼」と「忙しい」「スピード」「恋」がイメージ上、直接結びつくとは想像し難い。「鬼」の比喩表現はイメージの反映によってなされると考えられるが、このような回答が得られたのはなぜだろうか。

次の図2は「鬼」の語義とそのイメージの関係を示している。

イメージとは、語義の外側に付着している概念である。前項a～dで示した後接部分の比喩

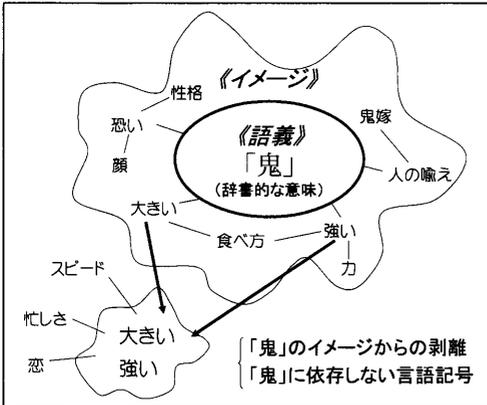


図2 「鬼」の語義とイメージの関係

対象は、辞書で意味説明がされているような鬼の容姿や性質、行動様式から十分に想像される語であり、「顔」「力」「食べ方」いずれも鬼のイメージに付着している。したがって、「怖い」「大きい」「強い」といった性質イメージを含ませつつ「鬼のような」と直喩されても自然な表現となる。a～dの比喩対象は「鬼」のイメージ内にある比喩対象である。

ところが、e～gで示した後接部分の比喩対象の場合は、「鬼」とどう結びつくのかが疑問である。「忙しさ」「スピード」「恋」、どれも「鬼」の語義として内包されていなければ、イメージとして

語義の周囲に付着もしていない。これらは、「鬼」のイメージ外にある比喩対象である。しかしながら、「鬼のような」という直喩形式が成立している。

このような表現が発生したのは、強意的用法を作る性質イメージ「大きい」「強い」が、「鬼」のイメージから剥離し、言語記号的にとらえられたことに起因すると考えられる。それまで「鬼」に付着し性質を表現してきた「大きい」「強い」が、「鬼」のもとを離れたことによって、「鬼」のイメージに内包されない対象までも比喩可能となったのである。

「鬼」のイメージ内にある比喩対象は、鬼の存在を前提に、鬼がそうする通りに、あるいは鬼がそう振る舞うであろうという視覚的なイメージをもって比喩がされている。そのため、鬼の存在から強大なエネルギーを感じ取ることによって、強意的用法へ結びつけている。一方、「鬼」のイメージ外にある比喩対象は、「鬼」に付着した強意的なイメージを剥がし取って、単に「大きい」「強い」という語感だけを利用して強意的用法を作り上げている。鬼そのものの姿や振る舞いはもはや必要とされていないのである。

そもそも鬼は想像上の生き物であり、いくら辞書でその存在が定義されたところで抽象性を否定することはできない。したがって「鬼」は語義よりも語感やイメージが重視されやすいと思われる。それゆえに、e～gのように「鬼」の語義を捨象しイメージのみに目を向けた強意的用法が発生したのだと考えられる。形式上は「鬼」の直喩でありながら、内容的には「鬼」の直喩ではないのが、「鬼」のイメージ外の強意的用法である。

6-2-3. 【数量】カテゴリーと「鬼」

【数量】カテゴリーに属する回答は全て「鬼」のイメージ外の強意的用法であると言える。前述fの「(鬼のような) スピード」や「(鬼のような) 暑さ」など、強弱や大小を示すことができる概念に「鬼」の強意的性質を記号的に用いている例である。

「課題」「練習」のコードを【数量】カテゴリーに含めた理由を、「課題」とコード化した回答「宿題」を例に挙げて述べる。

h	鬼のような <u>量</u> の宿題	} = 大量の宿題	(20代女性【数量】「量」)
i	鬼のような <u>宿題の量</u>		(20代男性【数量】「量」)
j	鬼のような <u>宿題</u>		(20代女性【数量】「課題」)

h、iの「鬼のような量」はいずれも「大量」を表していると考えられる。「鬼」のイメージ外の比喩対象である「量」を強調する記号として「鬼のような」が機能していることがうかがえる。hやiのような回答が得られたことから、jも「大量の宿題」という解釈が可能であると考えられたため、【数量】カテゴリーに分類した。もちろん、他の語感でイメージするならば「鬼のような(難しい/きびしい)宿題」などの解釈もできるが、量の強調として解釈可能であることを重視して【数量】カテゴリーとした。

6-3. 調査(2)「鬼のように〜」集計結果

調査(2)の集計結果を品詞別に次の表3に示す。表中の「出現率」は有効回答者数に対する出現度数の割合を示す。出現率は小数点第2位以下を四捨五入し、第1位までを示している。動詞、イ形容詞は上位10項目、ナ形容詞は全回答(11項目)を示す。集計時には「架空だ」「アフロだ」「デブだ」(出現度数各1)という「名詞+助動詞『だ』」の形も出現したが、例外として次の表3には含めない。

表3 調査(2)「鬼のように〜」品詞別集計

(n=323)

動詞			イ形容詞			ナ形容詞		
延べ語数 306			延べ語数 312			延べ語数 19		
異なり語数 85			異なり語数 42			異なり語数 11		
コード	出現度数	出現率	コード	出現度数	出現率	コード	出現度数	出現率
	75	23.2	怖い	87	26.9	乱暴	4	1.2
	24	7.4	強い	86	26.6	頑固	3	0.9
	21	6.5	大きい	24	7.4	力持ち	2	0.6
	15	4.6	赤い	21	6.5	必死	2	0.6
	12	3.7	酷い	19	5.9	身軽	2	0.6
	10	3.1	厳しい	12	3.7	中途半端	1	0.3
	9	2.8	忙しい	8	2.5	豪快	1	0.3
	8	2.5	たくましい	5	1.5	元気	1	0.3
	7	2.2	悪い	4	1.2	馬鹿	1	0.3
	6	1.9	早い(速い)	4	1.2	非道	1	0.3
						乱雑	1	0.3

動詞とイ形容詞は延べ語数ではほぼ同じであるが、異なり語数を比較すると動詞はイ形容詞の約2倍となっており、動詞の方がイ形容詞よりも回答の幅が広い。米川(1997)の指摘する「鬼のように」の省略形「鬼」は、「形容詞の語幹や名詞につく」とされていたが、未省略形に

においては動詞の方にも広く接続していると言える。ナ形容詞は品詞自体の語数が動詞やイ形容詞に比べて少ないこともあり、回答は少なかった。動詞の「怒る」、イ形容詞の「怖い」「強い」の出現度数が突出しており、これら3語は出現率20%を上回っている。

6-3-1. 動詞

動詞では「怒る」の出現率が23.2%と高くなった。調査(1)では、「怒る」に関する回答は「怒り方」(【動作】カテゴリー)が1件あったのみであった。「鬼のように〜」という書き出しから動詞を考える場合、「鬼」のイメージとして多く支持されるマイナスイメージ「怖い」や、「鬼」が持つエネルギーの高さに目を向け、特定の人物が激しく怒っている様をイメージした回答者が多くなったと考えられる。「怒る」の他に、「暴れる」も「鬼」のマイナスイメージが強く表れている語である。

「働く」は「鬼」のイメージ外にある比喩対象である。出現率は10%に満たないが、動詞では2番目に回答率が高く、イメージ外の強意的用法の中でも使用頻度の高い表現ではないかと思われる。「勉強する」も同様にイメージ外の強意的用法であると考えられる。

「働く」「勉強する」は、動作として目的意識を持つ点で共通している。『日国』は、「鬼」を人間に喩える際、「仕事の鬼」などのように「物事に精魂を傾ける人」を表せるとしている。これは『日国』の「鬼」の項目において最も「鬼」の強意的用法に近い性質を持った説明と考えられる。「働く」「勉強する」では、成し遂げようとする目的に向かって必死に打ち込んでいる様子を表現するために、「鬼」の強意的記号を利用したものと思われる。また、これらの語は若年層のみならず、中年層、高年層においても回答があり、50代や60代でも回答が得られた。目的意識のある動作へ「鬼」の強意的用法が働くことは比較的定着していると考えられる。

「食べる」「笑う」は調査(1)でも「食べ方」「笑い方」で回答の見られた語である。「怒る」「暴れる」「走る」とともに鬼の具体的な動作へ言及しており、人々が鬼から想像しやすい行動の一つであると考えられる。また、米川(1997)は「鬼」の用例として「鬼ぐい」を挙げている。「鬼ぐい」は「鬼のように」の省略および「食う」の転成名詞化によって造語されたものであり、「鬼のように食べる」と同様の意味内容である。

「振る舞う」「思う」「なる」は他の回答に比べて抽象的な回答であるが、出現例を詳細に見ていくとどのようなイメージを持っているかが明らかになる。

- | | | |
|----|--|---------------|
| k | 鬼のように <u>振る舞う</u> あの人が許せない。 | (20代男性「振る舞う」) |
| l | 鬼のように <u>思われた</u> としても、言うべきことは言っておきたい。 | (60代男性「思う」) |
| m1 | 鬼のように <u>なり</u> たい。 | (20代男性「なる」) |
| m2 | 鬼のように <u>強く</u> なりたい。 | (20代女性「強い」) |
| m3 | 鬼のように <u>なり</u> たい。などと思う人はあまりいないであろう。 | (40代男性「なる」) |

k、lは被修飾語の後に続く記述から、鬼のように振る舞うことや思われることをマイナスイメージでとらえていると考えられる。ところが、m1では希望の助動詞「たい」が接続し、鬼のようになることをプラスイメージでとらえている。また、m2のように「強くなりたい」

と鬼の強さに魅力を感じている回答も見られた。一方、m3では鬼のようになることをあまり肯定的にはとらえていない。「なる」はプラスイメージにもマイナスイメージにもとらえられている点が「振る舞う」「思う」とは異なっている。なお、m2は「なる」よりも「強い」の方が「鬼」のイメージをより表出しているのととらえ、イ形容詞の「強い」に分類した。

6-3-2. イ形容詞

「恐い」は全回答中最も高い出現度数となった。これはマインドマップ調査と同じ結果である。また、調査(1)のカテゴリーの中で形容詞が分類される【性質】カテゴリー内においても、「恐さ」は最も高い出現度数であった。「恐い」に次いで出現度数が高くなったのは「強い」「大きい」であった。「恐い」「強い」「大きい」は全てマインドマップ調査で上位項目となった性質イメージであった。「恐い」「強い」と「大きい」の間には出現率に20ポイント近い差があるものの、これらの語はやはり「鬼」のイメージとして表出されやすいと考えられる。マインドマップ調査と同じように上位項目となった「悪い」には「悪いことをする人」「悪さをする」のような回答が見られたが、出現度はわずか4であり、他の3語と比べると出現頻度が低かった。なお、「悪さ」はク活用形容詞の転成名詞で体言に分類されるが、「悪さをする」という述部としての内容を考慮し「悪い」へコード化した。

「恐い」には、調査(1)と同様にシク活用形容詞の「恐ろしい」もコード化して含めている。出現度数87のうち、ク活用「恐い」の出現度は75(全体の86.2%)、シク活用「恐ろしい」の出現度は12(全体の13.8%)であり、ク活用「恐い」が大部分を占めている。大野(1978)はク活用形容詞は客観的な状態をとらえ、シク活用形容詞は主観的な情意を表すと指摘している。したがって、ク活用形容詞は具体的な表現、シク活用形容詞は抽象的な表現となりやすいと考えられる。「恐い」は「強し」を語源としているが、大野(1978)は「強し」の持つ「物が硬い」という意味が、恐怖の対象に出逢うと人間の筋肉が硬直することに結びつき、今日のように「恐ろしい」意味で「恐い」と使われるようになったとしている。ク活用ながら情意を示す表現と思われる「恐い」も、本来は「筋肉が硬直する」という状態を指す表現に由来している。抽象性の高い存在である鬼には、より抽象的な表現のシク活用「恐ろしい」の方が好んで使用されても良いはずだが、結果として具体性の強い表現のク活用「恐い」の方が多く出現している点が興味深い。

「赤い」では「まっ赤な体をしている」や「まっ赤な顔になったコーチ」といった回答が得られた。これは日本の「赤鬼」イメージの反映である。

「酷い」や「厳しい」は「恐い」や「悪い」と同様にマイナスイメージの語である。「酷いことをする」「厳しいコーチの指導をうける」のような回答が得られた。

「忙しい」は調査(1)でも「忙しさ」の形で出現した「鬼」のイメージ外の比喩対象である。『日国』は、「忙しい」には「早くしなければならぬ用事に追われるさまである。また、用事が多く重なったりして暇がない。多忙である」という語義があるとしている。「忙しい」は、片付けなければならない仕事や課題が数多くあったり、スケジュールが多くて予定が詰まったりしているような状態を指す表現であると言える。したがって、「忙しい」はとらえ方によっては量的な概念であるとも考えられる。「忙しい」度合いも多様で、「非常に忙しい」こともあれば「やや忙

しい」こともある。このような程度の大小を表現する手法のひとつとして「鬼のように」という強意的用法が「忙しい」と結びついたものと考えられる。それ故に、「忙しい」状況の中で必死に「働く」様子や「勉強する」様子を表現するのにも、「鬼のように」を用いることが効果的であるとの判断がされたと思われる。

「たくましい」は鬼の大きくて筋肉質な体をイメージしての回答であると思われる。「強い」「大きい」と同様に「鬼」の男性イメージを象徴する回答である。

「早い」は鬼のどっしりとした身なりからは少し想像しかねるイメージである。しかし、動詞「走る」が回答されていることを踏まえると、巨体の鬼が走り回る迫力から「走る」程度の甚だしさが想起され、「早い」に結びつくと思われる。

6-3-3. ナ形容詞

「乱暴」「頑固」「中途半端」などのマイナスイメージの語が目立つ中、「力持ち」「豪快」「元気」といった鬼のパワフルな様子を指摘したプラスイメージの語も出現した。

「必死」は「鬼」の強意的用法に内包される意味のひとつであると考えられる。「鬼のように」に動詞「働く」「食べる」「勉強する」などが後接する場合は、接続部分に「必死に」を補い「鬼のように必死に働く」と表現することが可能である。米川（1997）は「鬼のように」が「非常に」を意味すると指摘し、『現代用語の基礎知識』2009年版は「鬼」が「とても」を意味するとしているが、このような「鬼」の強意的用法の解釈方法のひとつとして「必死に」があると考えられる。

「身軽」は「鬼」のイメージ内にあるのかイメージ外にあるのが判別し難く思われるが、「こぶとりじいさん」に登場する鬼は酒盛りをしながら踊りを踊っている。また、法華経総本山の本成寺では、節分の時に、鬼に扮して踊る人に豆をぶつけ、悪魔払いをする「鬼踊り」という儀式が行われている。このように踊る鬼の存在が認められるならば、「鬼」から「身軽」がイメージされても不自然ではない。

6-3-4. 「鬼」のイメージ外にある強意的用法の出現例

調査(2)の動詞およびイ形容詞の回答において上位10項目内には入らなかったが、「鬼」のイメージ外の対象へ比喩がされている回答例を5例抽出して示す。

- | | | | | |
|---|-------------------------|---|----------------|---------------|
| n | 鬼のように <u>モテまくる</u> | ≡ | 相当モテる | (30代男性「モテる」) |
| o | 鬼のように <u>野菜を出荷した</u> | ≡ | 大量に野菜を出荷した | (50代男性「出荷する」) |
| p | 鬼のように <u>他人がこつこつためた</u> | | 年金が入っていないと云う役人 | (70代女性「貯める」) |

n、o、pの3例は若年層の回答ではなく、中年層、高年層による回答である。「鬼のように」がイメージ外の比喩対象にも接続する強意的用法は、世代を問わず使用されている、若者語の範疇を越えた表現方法であると考えられる。

nの「モテまくる」は異性に人気があることを表す動詞「もてる」の連用形に動詞「まくる」

が付いて複合動詞となったものである。「まくる」はこの場合「動作を休みなく、また激しく行なう様子を表わす。盛んに…する」(『日国』)という意味で用いられる。「モテまくる」だけでも異性にとても人気があることは十分に表現されているが、さらに「鬼のように」が用いられることによって「モテる」度合いがよりいっそう高められている。

oやpは、「鬼」のイメージからはほど遠い動作が比喩対象となっている。野菜を出荷したり、年金を貯めたりするのは、人間からイメージされる動作である。それにも拘わらず、これらの動作に「鬼」の直喩形式が用いられているのは、「鬼」が言語記号と化していることの表れとも言える。

pは「こつこつためた年金」と表現されており、nやoに比べるとその動作の激しさが欠けているが、長年に渡り年金を貯め続けてきたという動作の継続性やひたむきさを強調するために「鬼のように」が用いられたと思われる。また、「鬼のように」が「云う」に係っているとらえることもできる。この場合は「年金が入っていない」と言ってくる「役人」に対するマイナスイメージが働く。

q	鬼のように <u>ヤバ</u> い	≡	非常に良い または 非常に悪い	(10代男性「ヤバい」)
r	鬼のように <u>美味</u> い	≡	とても美味い	(10代男性「美味しい」)

qの「ヤバい」はいわゆる若者語で、マイナスイメージにもプラスイメージにも使用される表現である。どちらで用いるかは文脈に左右されるが、いずれにしても「鬼のように」は「ヤバい」状態をより顕著にしていると考えられる。

rの「美味しい」に関連して、米川(1997)と『現代用語の基礎知識』の1994~1997年版、2006~2009年版に「鬼うま」が掲載されている。「鬼うま」は「鬼のように美味しい」が4拍に省略された語である。文章完成法調査で得られた回答の中には、「鬼のように美味しい」や前述の「鬼のように食べる」の他にも略語化されているものがあると考えられる。また、中国人留学生が「『鬼』が『美味しい』とはどういうことか」と質問してきたが、rは「鬼」の味のことを言っているのではない。ただ、「鬼」にプラスイメージを持たない中国人がこのような疑問を持つのも当然だと思われる。

7. 「鬼」の異形・巨大義との関連

『日国』や北原(2002)『明鏡国語辞典』は、「鬼」は他の名詞に付くことで異形・巨大などの意味(以下「異形・巨大義」)を表すことができるとしている。北原(2009)は「鬼」の強意的用法について「普通のものをはるかに越えているという意味から、程度が非常に高いという使い方が出てくる」と指摘し、異形・巨大義が応用されたとしている。

そこで、2009年7月~10月にかけて、『日国』に実際に掲載されている「鬼躑躅」「鬼鼠」など、異形・巨大義を持つ「鬼」の複合語とともに、「姫躑躅」「姫鼠」など「小さい」「かわいらしい」などの意味を持つ「姫」の複合語を調査項目(計8語)にしてアンケート調査を実施した。その結果、認知度を調査する設問では、「姫躑躅」が認知率20.9%である他は全ての語において認知率が20%を下回った。しかし、「鬼鼠」「姫鼠」「溝鼠」と、前件の異なる3語を提示し、

体長が大きいと思う順に並べてもらう設問では、「鬼鼠」が「姫鼠」より大きいとする回答率が95.0%となった。これは、「鬼鼠」や「姫鼠」に対する認知が無くても、「鬼」が付くと相対的に大きいものであるという類推作用が人々の間で働いていることの表れであると言える。

「鬼」の強意的用法発生の分析は、「鬼」の異形・巨大義の応用であるという通時的なとらえ方もあるだろうが、「鬼」の異形・巨大義を現代人が無意識に拡張しているという共時的なとらえ方でも検討する必要がある。

8. 考察

米川(1997)や『現代用語の基礎知識』が提示している「鬼」の強意的用法は、「鬼」のイメージに内包されない事象や動作などに対して「鬼」の比喩が及ぶ、「鬼」のイメージ外の比喩表現であると言える。比喩とは物事の説明を行う際に他の物事の様子を借りて説明することであり、比喩に用いる語に対して人々が抱く共通イメージが重要となってくる。しかし、「鬼」のイメージ外の強意的用法では、鬼そのものの容姿や性質、振る舞いのイメージから比喩がされず、「鬼」が持つ「強い」「大きい」というイメージを「鬼」から剥離し、そのエネルギーに満ちた語感だけを用いて効果的な強意表現を造り上げている。

「鬼ダチ」において略語化して表記されている「友達」も「鬼」からはイメージされない比喩対象である。佐々木(2008a)は「鬼ダチ」を「友達」と仲の良さの面で差を付けることが目的の「評価の呼称」に分類し、中学生や高校生を中心に友人関係をランク付けしている実態を明らかにしている。友人としての仲の良さや大切さを、「友達」という言葉を基準にして程度の高いものから低いものまで表現する必要性が生じた結果、「鬼」という語が持つ強意的性質に目が向けられたと考えられる。若者は鬼の姿形に目を向けたのではなく、「鬼」から感じる強大なエネルギーに目を向けたのである。

また、「鬼」のイメージ外の強意的用法の成立には、鬼が想像上の存在であるということが大きく影響している。具体性を欠いた抽象的な存在であるが故に、「鬼」のイメージに内包されない語を比喩する際に鬼の姿がイメージから捨象されやすいと考えられる。そのために、「鬼のような忙しさ」「鬼のように働く」などのような回答が文章完成法調査によって得られたのだと思われる。「虎」や「熊」では「鬼」の代役が務まらないのは、虎も熊も実在する動物だからである。

アンケートの自由記述欄(設問3)に、次のような意見が記述されていた。

「鬼のように」という言い方からは鬼の顔は思い浮かばない気がします。	(40代男性)
-----------------------------------	---------

この回答者は調査(2)で「鬼のように仕事に取り組んでいる」「鬼のように毎晩勉強している」という記述をしている。いずれも「鬼」のイメージ外の強意的用法であるが、「鬼の顔は思い浮かばない」という感覚がそのまま比喩に表れている。直喩形式でありながら、鬼の存在がないがしろにされている。イメージの中で生き続けてきた鬼だからこそ成立する特殊な比喩表現が「鬼」の強意的用法である。

9. 今後の課題

本稿で、「鬼」の強意的用法発生の原因を、「鬼」のイメージおよび比喩表現の関係から考察することができた。また、文章完成法調査では、「鬼」の直喩表現における強意的用法の使用が若年層に限らず幅広い年代で使用されていることが明らかになった。

「鬼」の強意的用法は、「鬼のような」または「鬼のように」という直喩形式の場合は使用率・認知率は高いと思われる。しかし、省略形「鬼～」に関しては、略語であることも踏まえ、使用率・認知率は低いのではないだろうか。今後は、Web上における使用例などを分析するとともに、「鬼」の強意的用法が具体的にどの世代でどの程度受け入れられているかを量的に調査していきたい。

【注】

- 1 マインドマップとは、1970年代初めにトニー・ブザン（1993=1996）が提唱した、人間の意味記憶を助けるのに大変効果的な記述法である。中心概念から連想する意味を次々に枝を伸ばしながら記述できるマインドマップは、特定の語に抱く情緒の内包や、より言語使用者の実態に即した語の意味を探るのに適していると考えられる。
- 2 マインドマップ調査の詳細な結果は佐々木（2008b）を参照のこと。
- 3 「ないたあかおに」は浜田廣介を著者とするため（初版は1965年、偕成社）本来は二重鉤括弧で表記すべきであるが、現在、複数の出版社からイラストを変えて数多く絵本で出版されているため、本稿では鉤括弧で示した。「こぶとりじいさん」は『宇治拾遺物語』の「鬼に瘡取らるる事」にも見られる昔話のひとつである。

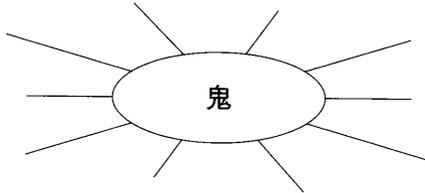
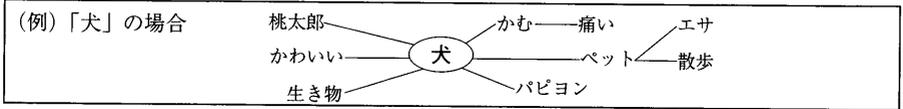
【参考文献】

- 大野晋（1978）『日本語の文法を考える』岩波新書
- 北原保雄編（2002）『明鏡国語辞典』大修館書店
- 北原保雄監修（2006）「もっと明鏡」委員会編『みんなで国語辞典！ これも、日本語』大修館書店
- 北原保雄編著（2009）「もっと明鏡」委員会編集『みんなで国語辞典② あふれる新語』大修館書店
- 佐々木翔太郎（2008a）「友人を表す呼称の多様化について－仮友から鬼ダチまで－」2007年度山口大学人文学部日本語文化論コース林研究室発行『現代日本語文化論』第1号 pp.1-57
- 佐々木翔太郎（2008b）「日本と中国における『鬼』のイメージの差異について－マインドマップ調査の分析－」平成20年度日本語教育学会『第10回地区研究会集予稿集－中国地区・口頭発表資料・講演資料－』pp.14-23
- 自由国民社（1988-2009）『現代用語の基礎知識』
- 小学館（2000-2002）『日本国語大辞典（第二版）』
- Tony,Buzan. and Barry,Buzan. (1993) *THE MIND MAP BOOK*. BBC Books（邦訳：トニー・ブザン著、田中孝顕訳（1996）『これが驚異のマインド・マップ放射思考だ！！』騎虎書房）
- 米川明彦（1997）『若者ことば辞典』東京堂出版
- 米川明彦（2009）『集団語の研究（上巻）』東京堂出版

別添資料

ことばに関するイメージ調査

① 「鬼」についてあなたが思いつく意味やことがらを、例も参考にしながら自由にお書きください。



② 以下の書き出しに続けて自由に文を完成させてください。

- (1) { 鬼のような _____
 鬼のような _____
 鬼のような _____
- (2) { 鬼のように _____
 鬼のように _____
 鬼のように _____

③ 「鬼」や「鬼のように (な)」に関して、何かご意見があればお書きください。

.....

.....

④ 以下の質問にお答えください。(1)～(3)は該当する項目に○を付け、(4)は括弧内にご記入願います。

- (1) 年齢 [10代・20代・30代・40代・50代・60代・70代・80代以上]
- (2) 性別 [男・女]
- (3) 職業 [中学生・高校生・大学生・社会人(有職)・社会人(無職)・その他()]
- (4) 出身 [] 都道府県 ※外国の方は国名を記入してください []

ご協力ありがとうございました

山口大学大学院人文科学研究科 佐々木 翔太郎